

高等学校

【兵庫県】

仁川学院高等学校
報徳学園高等学校

【山口県】

早鞆高等学校

【福岡県】

沖学園高等学校
九州国際大学附属高等学校
クラーク記念国際高等学校
久留米市立久留米商業高等学校
久留米信愛高等学校
高稜高等学校
精華女子高等学校
星槎国際高等学校
筑陽学園高等学校
中村学園高等学校
博多高等学校
博多女子高等学校
東筑紫学園高等学校
東福岡高等学校
一ツ葉高等学校
福岡県立育徳館高等学校
福岡県立香椎工業高等学校
福岡県立春日高等学校
福岡県立香住丘高等学校
福岡県立北九州高等学校
福岡県立新宮高等学校
福岡県立須恵高等学校
福岡県立田川高等学校
福岡県立筑前高等学校
福岡県立中間高等学校
福岡県立直方高等学校
福岡県立福岡芸術高等学校
福岡県立若松高等学校
福岡工業大学附属城東高等学校
福岡女子商業高等学校
福岡第一高等学校
福岡大学附属若葉高等学校
北筑高等学校
大和青藍高等学校

【佐賀県】

弘学館中学校・高等学校
佐賀県立佐賀北高等学校
佐賀県立佐賀西高等学校
佐賀清和高等学校

東明館高等学校
龍谷高等学校
早稲田佐賀高等学校

【長崎県】

海星高等学校
向陽高等学校
純心女子高等学校
長崎県立大村高等学校
長崎県立対馬高等学校
長崎南山中学校・高等学校

【熊本県】

くもと中央高等学院

【大分県】

楊志館高等学校

【宮崎県】

宮崎県立宮崎西高等学校

【鹿児島県】

鹿児島県立種子島高等学校
鹿児島実業高等学校
鹿児島純心女子高等学校

塾・予備校

【東京都】

武田塾本部
代々木ゼミナール

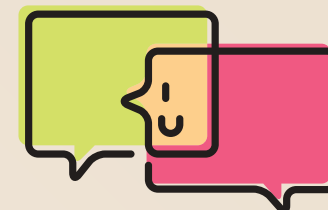
【福岡県】

笠原塾
学校法人・専修学校久留米ゼミナール
株式会社全教研
キャタル薬院大通校
城南コベッツ笹原駅前教室
Dr.関塾甘木校
メンタルゼミ

企業・団体

株式会社アルファ
株式会社プレゼン製作所
教育出版株式会社
毎日新聞社

学びをつなぐ 総合会議



2026年 高大接続総会 実施報告書

福岡会場

2026年6月12日(金)
13:00～18:00
博多国際展示場&
カンファレスセンター
3階ホール302・303

来場者数 135名 ● 高等学校教員:112名 ● 塾・予備校:16名 ● 企業・団体:7名

大学ブース出展大学

桜美林大学
大阪医療大学
大阪工業大学
大阪成蹊大学
大阪成蹊短期大学
神奈川工科大学
金沢工業大学
鹿屋体育大学
関西学院大学
北九州市立大学

九州工業大学
九州産業大学
熊本県立大学
久留米工業大学
久留米大学
Co-Innovation University
国士舘大学
駒澤大学
佐賀大学
山陽小野田市立山口東京理科大学
芝浦工業大学
淑徳大学

成蹊大学
西南学院大学
崇城大学
拓殖大学
千葉工業大学
中央大学
東海大学
東京農業大学
同志社大学
東洋大学
長崎大学
西日本工業大学

日本工業大学
兵庫県立大学
広島県立公立大学法人叡啓大学
広島工業大学
福岡県立大学
福岡女学院大学
福岡女子大学
福岡大学
立命館アジア太平洋大学



これからなにが起きるのか。 変化を読み解くヒントを見つけてください。

東京、大阪、福岡。みなさまのお力添えで、今年も3つの接続総会を終えることができました。会場の様子を眺め、来場者のみなさま、出展大学のみなさま、それぞれ「接続総会の参加の仕方」が多様になっていると感じました。「プレゼンコーナー」で「わかべんクリニック」で「おしゃべりプラザ」で、そして各大学の出展ブースで、「高大」だけではなく、さまざまなひとが縦横無尽に「接続」していったようです。コロナ禍以降、世界は驚くほど姿を変え、求められる教育も一変しました。これからなにが起きるのか、どのように変化を乗り越えていったら良いのか。ひととひとがつながり、語り合うことがなければ、答えは決して見つかりません。接続総会を、その機会のひとつに。来年、また接続総会でお会いしましょう。

アロー教育総合研究所 所長 田嶋 裕



冒頭、司会の中根氏が「ホテルやコンビニ、飲食店などでも外国人スタッフを見かける機会が増えている。内なる国際化というものも、すぐく進んでいる」と述べた。国際化は海外に行くかどうかではなく、もはや日本の日常空間のなかでも進行しているという事実が、議論のベースとして示された。

続いて米山氏がAPUの学びの特長について紹介する。APUでは、多くの国・地域から集まった学生が、日本人学生とともに生活し、学んでいる。授業は日本語と英語の両方で展開されるが、米山氏が強調したのは、国際化とは語学力ではない、ということ。むしろ、留学生と寮で生活し、授業で議論する中で、日本人学生が変わっていくことなのだという。米山氏は「国際的な学びというのは、外国のことや外国人のことを知るのではなく、自分自身を見つめて、自分自身を発見することだ」と語った。

許斐氏は、九州大学の国際化に向けた取り組みを説明した。同大学では、留学だけでなく、キャンパス内外での国際交流、地域でのフィールドワーク、海外大学とのオンライン連携授業などを通じて、学生が多様な形で世界とつながる機会を用意している。許斐氏は「国際への意識を強めるために、グローバルプロフェッショナル認定制度を設定しています」と紹介した。この制度では、異文化理解、課題解決、多文化協働、主体性、リーダーシップなどを、複数の学びを通じて育てていく。許斐氏が「やっぱり意識が一番大事なところ」と述べたように、九州大学は国際性を単なる海外経験の有無ではなく、ものの見方や行動の姿勢として捉えている。

続いて、議論は日本の英語教育のあり方へ。司会の中根氏から、「海外研修の場で、日本の生徒はどうして打ち解けられないのか」という話題から、

オープニングスペシャルプログラム

あなたは「国際」を知っていますか？

九州大学 国際戦略企画室 教授 《司会》
許斐 ナタリー様 芝浦工業大学柏中学高等学校 校長
立命館アジア太平洋大学 学長 毎日新聞客員編集委員
米山 裕様 中根 正義様

「日本の教育は、英語『を』学ぶことが中心になっていて、英語『で』学ぶという発想が弱いのではないか」と問題提起がされた。知識や技術として英語を習得すること、英語を道具として使い人と交わることの間には、大きな隔たりがあるのは事実だ。

米山氏からは、「APUの日本人学生が経験する最大のカルチャーショックは、英語ではなく『自己開示』だ」という興味深い視点が提示された。APUでは「アクティブリスニング」を徹底して志向し、相手の話を聞き、さらにポジティブだと感じたことを相手に言葉で返すことを重視する。「それが国際的な理解やコミュニケーションにおける一種の礼儀作法です」と語る米山氏によれば、自分の話が受け止められるという安心感が、学生の表現や思考を開いていくのだという。

許斐氏も、言語を「完璧に使うもの」ではなく「使いながら関係をつくる道具」として捉える視点を示した。同氏が研究者向けに開講している「サバイバルジャパニーズ」では、文法の正確さよりも、会話を成立させることを重視しているという。許斐氏は「文法については質問しないでください。一緒に会話する練習だけです」と伝えていると紹介し、転じて「日本人が英語を使うときにも、完璧さに縛られず、まず試してみる姿勢が必要」と語った。

その後、議論は国際性と就職、リーダーシップと国際性、異文化摩擦の克服など、幅広く展開していくが、中心にあるのはやはり「国際化とは英語や留学経験で測るものではない」ということだった。コミュニケーションの相手をしっかり見据えて自分を開き、相互の違いの中で学び続けることこそが、これからの時代に求められる国際的なだろう。



大学プレゼン 入試概況と情報イノベーション学部(2027年度新設)について

北九州市立大学は、全国屈指の就職実績を誇る公立大学である。内田氏は、まず近年の入試概況について述べた。一般選抜入試の学部学科別では、外国語学部中国学科と国際関係学科が大きく志願者を伸ばし、近年減少傾向だった経済学部は一転して大きく増加した。文学部と地域創生学群は安定傾向、理工系の国際環境工学部は機械システム工学科や情報システム工学科が大きく増加したという。

2027年4月には、情報イノベーション学部が新設される。同学部は情報エンジニアリング学科(定員68名)と共創社会システム学科(定員50名)から成る。

同学部の教育には4つの柱がある。第一は課題解決型学習である。企業が抱える実際のビジネス課題をもとに、学生が解決方法を探るPBLを展開する。第二は実践的教育で、一流企業の技術者や専門家による講義を通じて、地域や社会のリアルな課題を解決する力を身につける。第三は起業マインドの醸成で、市内企業関係者から起業に関する専門知識を学ぶ。第四はインターンシップで、連携企業や北九州市内企業の日常業務に関わるジョブ型インターンシップを通じて実践力を磨く。

内田氏は「2027年度版の入学選抜要項が今後発行されるため、最新の情報はそちらを確認してほしい」と呼びかけた。



北九州市立大学
広報センター長
内田 晃様



スペシャルトークセッション

生徒の夢を実現する 学部・学科選び[工業大学編]

九州工業大学 高大接続センター アドミッションオフィス 准教授(専門職) 《司会》
木村 智志様 芝浦工業大学柏中学高等学校 校長
毎日新聞客員編集委員
芝浦工業大学 入試・広報部次長 中根 正義様
土屋 公平様

「工業大学、工学部のイメージは今、大きく変わってきている」という司会の中根氏の発言から始まったこのトークセッション。かつては重厚長大、男子偏重という重苦しいイメージがあった工業大学・工学部だが、生成AIの発展や情報工学の進化、女子生徒の理工系進学への広がりを背景に、変化の時を迎えている。

その典型ともいえるのが、芝浦工業大学における女子学生比率の上昇だ。土屋氏は、同大学がかねてから女子学生の獲得に尽力してきたことを紹介。「今年4月の入学で女子が30%を超えました」と述べた。国も長期目標として理工系女子の拡大を掲げる中、芝浦工業大学では女性技術者を育てるプロジェクトを進めており、その成果が入学者構成にも表れているのだという。

芝浦工大柏中高の校長を務める司会の中根氏も、自らの知見を披露。高校の現場でも、理工系を志向する女子生徒は確実に増えているとのこと。「女子で理系と言えば医療系」というかつての常識はどこへやら、工学部への進学も目立つのが現状だ。

では、国立の九州工業大学はどうか。木村氏が強調したのは、同大学は女子枠を導入していないにもかかわらず、女子学生比率が上昇の一途をたどっていること。その割合は20%に迫っている。特に工学部では女子比率が全国的に見ても高い水準に近づいており、「工学系は男の世界」という時代は過去のものとなっている。

それでは女子学生の就職状況はどうか。土屋氏、木村氏は「女子学生の就職は男子と遜色がないどころか、むしろより良い状況だ」と声をそろえた。九州工業大学の女子学生では、学部卒の場合は九州内企業へ

の就職、大学院修了後では九州外の大企業へ進む例が増えているとのこと。学生たちからは、「女子の方が就職に有利な気がする」という声まで上がっている。特に大企業の場合、女性管理職比率など女性の活躍を意識することが多いなかで、「同等の能力なら女性を積極的に採用したい」という姿勢が多く見られる。芝浦工業大学もまったく同様で女子学生の就職率は非常に高く、複数企業から内定を得た学生が進路の選択に悩み、相談に来る例も少なくないのだとか。

工業大学、工学部で変化しているのは、女子学生の躍進だけではない。学びの構造そのものが変化しているのだ。九州工業大学の工学部は1年次では専門を固定しない総合類の設置、情報工学部は分野を超えたコース配属ができる仕組みを取り入れた。「『決めきれない』学生たちに対して、1年間の猶予を作っている」と木村氏は語る。芝浦工業大学では、「課程制」という新たなカリキュラムを導入。主たる専門を持ちながら他分野を学べる仕組みとなっている。「大学受験の17歳で下した選択が一生を縛るというのは、半分違う」と土屋氏。機械系の学生がAIを学び、生命科学の学生が土木を学ぶなど分野を横断する学びが、新しい発想につながっている。

さらに木村氏は「工学部での学びは国際的な進路にもつながる」と言葉をつなげた。九州工業大学は海外派遣プログラムへの参加率が高く、国際協力や海外企業での就職にも大きな存在感を発揮している。土屋氏は「工学は社会の課題を解決するためにある」と述べ、工学は実社会での生活を改善するための実践であるべきだと語った。





トークセッション

大学受験BIG3トークセッション 「2030大学クライシス」

元・駿台進学情報事業部長／
教育ジャーナリスト

石原 賢一様

代々木ゼミナール 教育情報センター
教育情報室 室長

木戸 葵様

株式会社ベネッセコーポレーション
教育情報センター長

渡辺 健太様

《司会》「進路づくり」の講師／
高大共創コーディネーター

倉部 史記様

大学受験業界を代表する論客が顔をそろえた本トークセッションは、最新のデータに基づいた卓見が飛び交う刺激的な40分となった。

タイトルの「2030大学クライシス」は、18歳人口の大幅な減少をテーマとしているが、そのテーマにいきなり厳しい点をつけたのが石原氏。「今は受験人口で言えば屈の時代です」という語りからスタートした石原氏によれば、本当に警戒するべきは2035年からの10年間なのだという。18歳人口が急減する局面こそが、大学経営と入試にとって本格的な転換点になると指摘した。

次いで、話題は2026年度入試の総括に移る。共通テストについて、石原氏は「平均点は下がったが、それでも6割程度は取れている」と説明した。特に国語、情報、英語リスニングの平均点低下が目立ち、新課程2年目の共通テストとして、受験生に一定の負荷がかかった。一方で、国公立大学全体の志願者数は大きく伸びなかった。むしろ慎重な出願姿勢が強まり、国公立大志願者数は前年並み、あるいはやや減少する結果となった。

私立大学の志願者増について、渡辺氏は、単純に受験生が増えたというより、1人あたりの出願数が増えた面が大きいと説明し、人気が大規模大学や知名度の高い大学に集まりやすい構造を示した。早慶上理、MARCH、関関同立など主要私大では志願者数が伸びた一方、合格者数は定員管理の影響もあり大きくは増やりにくい。多くの募集単位で志願者数増加と合格者数の絞り込みによって、実質倍率が上がり競争激化に繋がった。結果として例年よ

り難しかったという印象が残った。

木戸氏は、私立大学の合格者数が絞り込まれる背景として定員管理の厳格化を説明した。2016年度以降、定員超過率に関する基準が強化され、特に大規模大学では収容定員の超過が私学助成に影響する。志願者が増えても合格者を容易に増やせないため、受験生や保護者から見ると、主要私大が難化したように映る。

終盤では、2030年以降の大学と入試について議論が深められた。2035年以降、18歳人口が大きく減少する局面では、大学の淘汰や再編が避けられない。石原氏は「最後に残る大学はどこか、そこを見ていく時代になります」と述べ、大学の看板や偏差値だけでなく、教育内容、地域との関係、社会的な必要性が問われるとした。

木戸氏は、大学消滅の問題は私立大学だけではなく、国公立大学にも及ぶと語った。地域にどのような人材が必要なのか、大学がどの領域を担うかが問われると指摘した。そのうえで、「多様な可能性を子どもたちに見せることが、大人の役割です」と語り、進路指導においても地域や大学の変化を踏まえた視点が必要だとした。

渡辺氏は、入試が複雑化する中で、学校現場には最新情報を追い続ける負担が増えていると述べた。年内入試、共通テスト利用、科目負担軽減、新学部、女子枠、地域枠など、大学ごとに入試の世界が細かく分かれていく。渡辺氏は「大学ごとの変化を丁寧に確認することが、これまで以上に重要になります」と語った。

パネルディスカッション

「何とかしたい」から始まる進路指導 —— 偏差値を超えて、生徒の「熱源」へ

大正大学 名誉教授

山内 洋様

中村学園中学高等学校

池田 輝久様

アロー教育総合研究所

稲田 守

《司会》「進路づくり」の講師／

高大共創コーディネーター

倉部 史記様



進路指導の現場で生徒の潜在的な資質をどう見極め、育てていくのか。司会の倉部氏が冒頭「この30分で、これをすればいいという正解は出ないと思います」と語ったように、教師にとって古くて新しい、永遠の課題がテーマとなったこのパネルディスカッション。議論は興味深い展開を辿った。

まず口火を切ったのは、アロー総研の稲田氏。高校現場の先生方と関わる中で、進路指導の難しさを実感してきたと語った。職業観の変化、キャリアの非線形化が進む中で、従来のように「正解を教える」だけでは対応できない。稲田氏は「手法だけではなく、生徒をどう見るかということが、かなり大きなテーマになっている」と述べた。

続いて口を開いたのは山内氏。現在の高校の在り方を、教科学力と探求力を軸にした四象限で表した。「どれが正解というわけではありません」と山内氏が断りを入れたように、学校ごとに立場も事情も異なり、その中で先生方がそれぞれの生徒と向き合っているという整理である。また、探求力を重視する学校にも独自の苦労があるとも語った。生徒にも教員にも多くの活動が求められ、余裕がなくなってしまうのだ。

ここで紹介されたのが、池田氏が鹿児島県立高校勤務時代に関わった、奄美大島の高校から東京大学に現役合格した生徒の事例である。会場では、そ

の生徒を取り上げた映像が流され、教員らの支援のあり方が話題となった。池田氏は「当時、世界史は授業がなかった」と振り返った。そのため、授業で教えるのではなく、生徒が解いた答案に対してコメントを書き込む、交換日記のような添削で論述対策を進めたという。

池田氏は「授業をするとかけの皮が剥がれるので、添削指導だけにしました」と冗談めかして語ったが、その裏には教員がすべてを教え込むのではなく、生徒自身の学びを壊さず支えるという姿勢があった。

この事例で池田氏が大切にしたのは、教師側が環境の不利を理由に挑戦を止めないことだった。そもそも同校には、東大受験を目指す生徒を指導した経験がある教員は皆無。でも、地方だから無理、授業がないから無理、経験がないから無理と決めつけるのではなく、生徒と一緒に方法を探る。池田氏は「経験がないからできることもあるんだよ」と語った。そして、「大学受験はゴールではなく、スタートでしかない」と述べ、受験の途中で生徒を引きずり下ろさず、大学に入ってから伸びる力を信じることの大切さを示した。

池田氏は、奄美大島の生徒たちについて「素直で、すぐ仲良くなる」と印象を語った。一方で、学力面や学習習慣には課題もあり、定期考査の直前になってから宿題を始めるような生徒もいたという。しかし、そこで

不足だけを見るのではなく、その奥にある勢いや可能性を見ることが重要だった。池田氏の語りからは、生徒の現在の学力だけで進路を閉じない姿勢がうかがえた。

今回のパネルディスカッションで示されたのは、進路指導に万能の方法はないという現実だった。その一方で、生徒の内側にある火種を見つけ、消さずに育てるための視点が共有された。正解を与えるのではなく、生徒が自分の問いと可能性に向かって動き出す場をつくる。その営みこそが、進路指導の核心だと言えるだろう。

大学プレゼン

6年連続志願者数増加の理由と2027年度入試改革 志願者数の推移から見える関西学院大学の強み

関西私学の雄、関西学院大学。兵庫県内に西宮上ヶ原、西宮聖和、神戸三田の3キャンパスを置き、14学部を展開している。文系学部の印象が強い大学だが、三木氏は理系分野の強化を強調した。2021年度には従来の理工学部を再編し、理学部、工学部、生命環境学部、建築学部の4学部体制へ拡大し、文系・理系の双方に力を入れる総合大学としての姿を示した。

その実力を測るひとつの物差しとして、志願者数の増加が挙げられる。2021年度の約3万3000人から、2026年度には約5万7000人へと大きく増加した。近畿圏以外では九州出身の在学学生が最も多く、同大学も九州の高校に対する働きかけに力を入れている。

2027年度入試改革では、一般入試の出願期間を1月22日、つまり共通テスト5日後まで延長。共テ後に出願を考えたいという受験生のニーズに寄り添っている。また一般入試の受験は2月1日～7日。日程ごとに科目数や配点、方式が異なるが、これも受験生が自らの得意科目・不得意科目を踏まえ、自分に合った入試を選ぶようにするためだ。博多会場では全日程で受験可能で、他にも九州各地に試験会場を設けている。

共通テスト利用入試は大幅にリニューアル。全学部で8科目型を実施、高得点採用を拡充し、数学を生かせる英数型も新設する。

大学プレゼン

On the Campus, Off the Campus 探究のその先へ

最初に示されたのは、高校現場から寄せられた問いである。前田氏は、ある高校の先生から「高校での探究の学びは、大学でも継続されるのでしょうか」と尋ねられた経験を紹介した。高校では2022年度から「総合的な探究」が本格化しており、「探究学習世代」が大学に入学し始めている。本来であれば、大学こそ高度な探究的活動が展開される場であるべきだが、実際の大学教育では知識伝達型の授業が多いのも事実。この問題意識への対応として示されたのが、正課教育と準正課教育の間に生まれる「知の往還」である。これを具体化するのが、「教育推進プログラム」だ。このプログラムには大きく分けて正課授業を支援する制度と、準正課を支援する制度がある。準正課の支援では、学生創発プロジェクト、海外プログラム、実践型プロジェクト、資格取得支援、研究発表など、多様な活動が用意されている。学生創発プロジェクトでは、「学生のやりたい!」を軸に、地域社会と結びつく形でさまざまな実績を上げている。

西南学院大学は正課教育と準正課教育、キャンパスの内と外を行き来しながら、学生が主体的・自律的に問いや学びを深め続けられる環境を整えている。高校で身につけた問いを立てる力、自ら学ぶ姿勢を、大学でさらに伸ばし、社会へつなげていく。それが、西南学院大学の教育推進プログラムが目指す高大社接続の姿である。



関西学院大学
入学センター課長補佐

三木 健之様



西南学院大学
入試・国際・教育推進部 教育推進課 課長

前田 誠史様

講演

マグロのつぎはノドグロ？ 近大の戦い方

近畿大学 常任理事 経営戦略本部長

世耕 石弘様

近畿大学は、「実学教育」を建学の精神に掲げ、社会に役立ち、かつ利益を生み出して次の研究へと投資する循環型教育を展開している。世耕氏いわく、同大はマグロの完全養殖に代表される高い研究力で知られるが、2026年2月には世界初「ノドグロ」の完全養殖成功を発表。歴史に裏打ちされた育てる漁業の技術は、日本の水産業や世界の食卓に革新をもたらしている。研究成果を発信するため、大阪や東京で3店舗の養殖魚専門料理店を出店しており、昨年大阪・関西万博への出店では11万人を超える来場者を記録し、開幕から最終日まで連日満席となっていた。

同大は、16学部50学科を有する総合大学で、全国にある6キャンパスでそれぞれ特色のある教育を行っている。2025年11月に一大プロジェクトとして約1000億円を投じた「近畿大学病院」の大規模移転を完遂し、大阪府堺市に新病院を開院。翌年4月に開設された看護学部では、男性看護師の育成にも本格的に着手している。また、多様な学びのニーズに対応するため通信教育も拡充しており、新設された建築学部オンライン学士プログラムの一級建築士受験資格取得コースには募集定員を超えた多くの方が全国から集い、製図実習等に励んでいる。

何より重視しているのが、学生が自発的に学びたくなる「場と空気（雰囲気）」づくりだ。アカデミックシアターには、24時間利用可能な自習室や女性専用実習室、数万冊の漫画を含む多彩な蔵書が整備されているほか、24時間開放の起業支援施設、最新機材を備えたeスポーツアリーナの開設や、24時間利用可能なジムのリニューアルなど、学生が自然と大学に集まる環境を整えた。背景には、近畿圏にとどまらず全国から志願者を集めたいという狙いがあり、一人暮らしの学生でも時間を気にせず学べる環境づくりを進めている。すでに200社を超える「近大発ベンチャー」が誕生しており、学内で学生にラーメン店を運営させる起業支援も定着し、現在は5代目の学生が店舗運営を担っている。こうした取り組みもあり、九州地区をはじめとする近畿圏外からの志願者数が年々増加している。広報戦略においても革新を続け、今年からは紙の大学案内を完全に廃止し、SNSと生成AIを活用したデジタル広報への全振りも決定。海外のクリエイターと連携し、AIを活用して低コストかつハイクオリティで制作されたプロモーション動画は、感度の高い若者の心を捉えている。AI検索が主流の現代、ウェブ上に大量の情報が露出していること自体が強みになる。世耕氏は「チャレンジする大学で、自分ももっとチャレンジしたいと思える空気感を与えながら、とんでもない少子化の時代を生き残っていきたい」と締めくくった。

2025年11月に一大プロジェクトとして約1000億円を投じた「近畿大学病院」の大規模移転を完遂し、大阪府堺市に新病院を開院。翌年4月に開設された看護学部では、男性看護師の育成にも本格的に着手している。また、多様な学びのニーズに対応するため通信教育も拡充しており、新設された建築学部オンライン学士プログラムの一級建築士受験資格取得コースには募集定員を超えた多くの方が全国から集い、製図実習等に励んでいる。



大学プレゼン

広島県公立大学法人叡啓大学 学生がつなぐ~叡啓大学の高大接続~

今年開学5周年を迎えた叡啓大学は、1学年100名規模ながら留学生含む学生の4人に1人以上が海外にルーツを持つグローバルな公立大学だ。英語のみでの学位取得が可能で、職員の村本氏は「アジア圏だけではなく、日本で生活しているとなかなか出会えないような、幅広い地域から多様な留学生が集まっている。」と語る。ただし、英語はツールで、それをつかって「何をするのか」を重視するなど、開学して間もない小規模大学でありながら、新しい取り組みに力強く挑んでいる様子が伺える。

続いて登場した森氏は、マイクを握ると客席に降りるパフォーマンス。「最初を100としたりどれくらい体力残ってますか?20くらい?」と客席を盛り上げ、雰囲気をつかんだ。そんな森氏が叡啓大学を選んだのは、生成AIの影響だった。「高校の調べ学習課題は、AIなら5分で終わる。社会に出るとき、従来型の学びがどう役立つのか疑問に思った」というのだ。手探りを続けるなか、森氏はシステムデザインという学問に出会い、縁を得て叡啓大学に入学した。

森氏は同大学について、「学生が主役」と言い切った。まだ若い大学でネームバリューはなく、学生自身が何を学び、何をするかで価値が決まる。「高校時代異端児だった自分のように、叡啓大学に合う生徒は学校に必ず1人はいはるはずです」と熱っぽく語った。



教学課入試係 係長

村本 裕子様

ソーシャルシステムデザイン学部 3年

森 佑太様

お悩み相談

「わかべんクリニック」

人気企画「若手高校教員向けオンライン勉強会」がオフライン版プログラムとして登場。6名の登壇者が様々なお悩みに対し、探究学習を生かした受験対策をはじめ、小論文や記述式・論述問題の対策、総合型選抜の攻略法などあらゆる角度から学習のヒントを処方しました。



入試に直結する文系探究

代々木ゼミナール／Z会東大進学教室／日世教育研究社 犬丸 征一郎様



従来の暗記型授業ではなく双方向型の授業を実践している、日本史論述指導のエキスパート・犬丸氏。入試問題の変化として、東京の難関大学の論述問題を例に、知識の暗記だけでなく論理的思考力を問う問題が増加していることを指摘する。日本史教科書の抽象的な概念部分を活用し、「なぜ」「どうして」という発問を通じて思考力を育成することの重要性を強調。また、論述は基本的に探究学習と相性が良いとし、その学習過程で身に付く「筋道を立てて考える力」

が論述試験に直結すると説く。その上で、高校の探究学習は、大学における研究と違って新規性が求められる点を挙げ、高校段階では先行知見の整理や問いの立て方を学ぶプロセスが大変重要であると説明。入試への直接的な“役立ち”より、大学進学後の学問につながる学びが本質であると付け加えた。

難関大学の総合型選抜攻略法

総合型選抜入試塾専門塾 EQAO代表 玉村 ナオ様



“すきを見つけて、すきを伸ばす”を教育理念に掲げる、総合型選抜入試専門塾の代表・玉村氏。今回は総合型選抜の書類の中でも重要な役割を担う、志望理由書の書き方を解説した。玉村氏は、核心となる概念として志望理由書を「自分なりに研究行動してきたけど、限界を迎えたから大学さん教えてください申請書」と定義。この概念を、特筆すべき経験・特技はないが、あるパラエティー番組をこよなく愛する長野県のある高校生が、上智大学新聞学科に合格するまでのプロセスを例に説明した。よくある誤解として「やりたいことを書けば受かる」「ポラントニアをやれば受かる」などを挙げ、これらを否定。志望理由書指導は文章を直すことではなく中身を見ることであると強調した。重要なのは仮説検証であり、大学は研究機関として研究人材の卵を求めていると説く。

高校生向け探究プログラム「ディスカバ!」のミニ体験

桜美林大学 入学部 ディスカバ!事務局 今村 亮様



桜美林大学が高校生向けに提供するキャリア支援プログラム「ディスカバ!」。高校生が「見つける (discover)」体験を通じ、学ぶおもしろさと可能性を育むことを目的に、出張授業や大学連携によって探究の実装を支援している。探究学習では、問いを立てることに迷う高校生が多いとし、この日は問いを立てる練習やプロセスを体験するミニワークショップを実施。開催中のFIFAワールドカップ2026も題材に取り上げ、時事ネタやエンタメ性の高いトピックを用いて、参加者同士盛んに意見を出し合った。今村氏は探究学習を成功に導くポイントとして、探究 (=調べても正解が出ない問いか)、検証 (=確かめるアクションが可能か)、関心 (=ワクワクするか) の条件を満たすことが重要であると説明。あわせて、よくあるつまづきと改善ポイントの解説で締めくくった。

「プレゼン」「レポート」「ディスカッション」指導のポイント

河合塾小論文科 田本 正子様



医学部・看護系志望の生徒指導に定評のある田本氏が、多様化する大学入試制度におけるプレゼンやレポート、ディスカッションの実践的な指導方法を紹介。冒頭では、それらの選抜方法を通して「大学は学生の何を見ているか?」の問いに対し、入学後に“本気で学ぶ力”を持つ学生を求めていると分析。学ぶ力とは、理解 (情報収集能力、人の意見を聞く力など) → 論点整理 (今論じるべき問題を見出す力) → 表現力 (プレゼン力など) の3段階構成からなり、特に論点整理の重要性を訴える。具体的なトレーニング法として、新聞記事の要約とタイトル付け、写真へのキャプション付け、他者の意見へのコメント、質問する力の育成、探究活動の活用などを提案。フィードバックの際は、良い点を褒めてから改善点を1つ指摘し、具体的なアドバイスを与える方法を推奨した。

講 演 大学受験系YouTubeの闇 (活用法)



高校生のオンライン塾【展覧堂】代表

天童 辰也様

YouTuberらしく、まず結論を提示した天童氏。いわく、「大学受験系YouTubeにおいて、先生方が参考にできるものはほぼありません」。大学受験系YouTubeで流れている情報の多くは、教育関係者向けではなく、受験生とその保護者に向けてつくられている。つまり、「受験の素人向け」だ。したがって、学校の進路指導担当者がそのまま参考にできる専門的な情報は少ない、というのが天童氏の見立てである。

その構造を踏まえ、天童氏は大学受験系YouTubeで再生回数が増える動画の特徴を説明した。再生数が多いのは、受験生や保護者が望む情報、共感を生む内容、分かりやすい結論を持つ動画である。YouTube上で目立つ情報が必ずしも進路指導に必要な情報とは限らないことを指摘した。

さらに天童氏は、受験生や保護者がYouTubeに強く影響されている現状に注意喚起した。動画で何度も見ている発信者に対して、視聴者は親近感や信頼感を抱き

やすい。その言葉は、学校の先生の助言より強く響いてしまうことがあるのだ。

対応策として、天童氏は三つの注意点を挙げた。第一は、サムネイルをうのみにしないことだ。「サムネイルは極端な表現の嵐です」と述べ、クリックさせるためにサムネイルには刺激的な言葉が並びやすいが、実際の中身はそれほどでもない、ということも少なくない。

第二の注意点は、情報の出どころを確認することである。天童氏は、AIに台本を作らせ、情報の真偽を調べずに動画化しているチャンネルもあると指摘した。

第三の注意点は、チャンネル登録者数や再生回数だけで信頼性を判断しないことだ。天童氏は「チャンネル登録者を購入しているチャンネルも存在します」と語った。

大学受験系YouTubeの問題点を語ったうえで、天童氏は、学校の先生にしかできない進路指導がある、と語った。天童氏は「YouTubeはあくまで一般論に過ぎない」と述べたうえで、「先生方の強みは、生徒一人ひとりの状況を踏まえた個別性にあります」と語った。成績、性格、家庭の事情、志望、学習状況を見たらうでで助言できるのは、生徒と向き合っている学校の先生だけである。その強みを忘れないことが重要なのだ。

ゼロからはじめる小論文

河合塾小論文科 広川 徹様



高校教員向けに小論文指導の実践的な方法論を徹底解説。広川氏は、小論文を「読んで考えて書くという一連の知的な作業」と定義し、これが大学入試で測られる重要な能力であることを強調する。具体的には、課題文の読解、設問への応答、論述の展開構想、わかりやすい日本語での表現という4つの要素が評価されると述べた。問題演習がおもな指導方法となるが、出題テーマが文系・理系を問わず多岐にわたる上に、問題選定、答案作成、採点添削、問題解説という膨大な作業が必要であることを指摘。そこで、作業時間や手間を大幅に削減する革新的な手段として、AIを活用した指導の自動化を提案した。採点基準の作成から答案採点まで、約30分でAIによる自動化が可能であることを具体的に説明。これにより教員の負担軽減と練習回数の増加が実現できるとした。

総合型選抜で役立つ 新聞・資料の読み方調べ方

大学ジャーナリスト 石渡 嶺司様



総合型選抜・学校推薦型選抜は、以前のAO入試時代と比べて大幅に難化していると石渡氏は訴える。現在は面接で志望分野の関連書籍を読んでいるかどうかを問われることも多く、その対策として高校図書室や公立図書館のレファレンスサービスの活用を提案した。新聞の活用については、すべての記事を読む必要はなく、800~1000字程度の社説を小論文対策として読むことを推奨。国際面、教育面、科学面など各紙の専門面を志望分野に応じて選択的に読む有効性も述べた。また、就職活動における学歴フィルターが存在についても言及。1990年代後半から2000年代の就職氷河期時代に形成されたものが、現在の売り手市場では大幅に緩和されていると分析。ただし、総合商社や外資系企業では依然として存在し、適性検査では高校数学レベルの知識が必要であると語った。